

### 第3回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

1 日時 平成17年7月14日（木）午後9時30分～午後12時30分

2 場所 長野県庁西庁舎 111、112 会議室

3 出席委員

中村 正行委員長	市川 浩一郎委員
森野 貞雄副委員長	若麻績 享則委員
青木 一委員	清水 保委員
中沢 一委員	小山 壽一委員
小山 元彦委員	宮本 精一委員
塚田 芳樹委員	丸山 稔委員

4 開会

（三澤教育支援主事）

皆さま、おはようございます。

本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは委員長、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

おはようございます。

第3回の推進委員会を開催させていただきます。

本日は、前回の推進委員会の中で要求がありました資料を事務局のほうでつくっていただきましたので、それを説明していただきながら、内容について皆さんでご討論いただきたいと思います。魅力づくりと絡めまして、資料を活かしていただきたいと思います。

前回は、総合学科高校について少し話をしましたのでその続き、それからまず多部制・単位制、それからまた新しい用語で、総合選択制というものも出てまいりましたので、その辺のことで魅力づくりと絡めてご討論いただきたいと思います。

議論の途中で注目すべき点が出てまいりましたら、そちらへ話を進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次第の1の資料説明について、事務局からお願いしたいと思います。

5 資料説明等

（三澤教育支援主事）

資料の説明に先立ちまして、今回の6月県議会の状況等につきまして、報告させていただきます。

(松澤教育長職務代理者)

おはようございます。

私は、教育委員会事務局教育次長の松澤でございます、よろしくお願いいたします。

委員の皆さまには、大変お忙しい中、早朝からご出席をいただきましてありがとうございます。

当第一推進委員会では、去る6月25日に委員長さんのほうからお話がございましたとおり、第2回目の会議を開催していただきました。それ以降、ただいま司会のほうから申し上げましたとおり、県議会での動き、また他地区の推進委員会も進んでおりますので、その状況等についてご報告をさせていただきたいと存じますので、よろしくお願いいたします。

初めに他地区の推進委員会の開催状況でございますが、7月3日に東信地区第二推進委員会の第3回目が開催されました。それから7月10日には、中信地区第四推進委員会でございます。7月12日に、南信地区第三推進委員会が第3回目ということで開催されところでございます。

第二推進委員会におきましては、6月24日再編整備候補案をご提示する前の6月19日に第2回目を開催いたしまして、その後7月3日に第3回目を開催したところでございますが、第3回目の会議では候補案は検討材料として受け止め、第二推進委員会としては、検討依頼事項に沿って審議を進めていくと、そのようなご確認をいただきまして、魅力ある高校づくり等々の議論を進めていただいているところでございます。

また7月10日の第四推進委員会におきましては、魅力づくりについての議論の中で、小中高の連携や、高校以外の研究機関や大学校、職業訓練校などとの連携、それから地域教育プラットフォーム、さらには全国募集の学校などについての議論がございました。

一昨日7月12日の第三推進委員会におきましても、魅力ある高校づくりの検討が行われまして、とりわけ、いわゆる地域高校の魅力づくりについての議論がございました。また高校現場を視察してはいかがというようなご提案もございまして、今後検討をしていくというふうになっているわけでございます。

次に県議会の審議状況でございますが、6月28日から7月4日まで5日間にわたって、一般質問がございました。28人の議員の方が一般質問されたわけですが、そのうち15人の委員さんが高校改革プランに関連してのご質問をされ、そのうち3人の議員さんが推進をするという立場からのご発言をいただきました。

議論のポイントといたしましては、ひとつとして推進委員会に年末までに報告を求め、年度内に実施計画を策定するというスケジュールはあまりにも拙速ではないかというご議論。また各推進委員会にご提案をいたしました、再編整備案を白紙撤回すべきではないかというご議論、あるいは6月14日と24日の2回、両日教育委員会が開催されて議論が行われましたが、その非公開になった内容はどうだったのかというご議論、また今後再編整備を行っていく上で、予算的なものはどのようになっているか、このようなポイントについていろいろな角度からご議論をいただいたということでございます。

また7月5日から7日まで3日間、文教委員会が開催されました。そのうち5日と6日が、特に高校改革プランについての集中審議ということで、5日の午後につきましては宮澤教育委員長の出席が求められまして、委員長を中心に審議が行われたわけでございます。

内容的は、ただいま申し上げました一般質問の議論をさらに深めた質問等がなされたという状況でございます。

また報道等でご案内のことと存じますが、文教委員会として高校改革プランの実施計画策定について慎重な検討を求める決議というものが発議されまして、7月11日の本会議において可決をされたところでございます。

教育委員会といたしましては、その決議の内容が実施計画策定について慎重な検討を求めるというポイントにあるということで、現在既に各推進委員会で魅力ある高校づくり等について議論が進んでいるわけでございますので、現在進めていただいております議論を、さらに深めていただけたらと、そのように希望しているところでございます。

6月25日以降の経過については以上でございます。

よろしくお願いいたします。

#### 資料説明

高校教育課三澤教育支援主事から説明 【説明内容省略】

## 6 議事

(中村委員長)

ありがとうございました。たくさんあって、すぐに把握するのはちょっと難しいのですが、資料1から7、それから参考資料は、第1回、第2回のこの推進委員会で要求したといたしますか、資料が見たいということで用意していただいたものと、他の推進委員会で用意された資料もまざっているのですが、今ご説明いただいた内容でご質問等ありましたら、事務局のほうにお願いしたいと思います。

(青木委員)

今の最後の資料7の部分は私が前回、資料をお願いしたものであります。提供ありがとうございました。

ただ、私はこの資料7を求めたのは、ここに資料6もございますが、前回は資料13として出された、一般会計の中の教育費の推移という資料があっただけに、もちろん今回の、私どもに投げかけられた制度の1つには、このような経済のことも考えなければいけないという(2)の問題があるわけでございますから、そのような意味合いでこの資料13を前回出されたのであろうと思います。そうであるならば、一体全体、経済効果がどれだけあったのか。

教育の現場をお金で語るのはいやですが、それでも背に腹は変えられない問題として、出されたというように判断をし、ではその効果を知りたいというのが、率直な思いであり、その代わり、今出された資料7だけでは、私の思っている資料請求ではないわけです。これは特に、2つが1つになって、約2億3,000何がしかの差額が生じたということは、それぞれ1から4の中でたくさん具体校名を出された県教委の中で、このお金をたくさん産み出すことによって、総合学科高校では、たくさんまた逆にお金が掛かる。単位制・多部制の学校にもお金が掛かる。ですから、たくさん産みだせば産みだすほど、その補填はできるが、2、3、4のほうでは、具体校名が少ないところでは、逆に言うと、その穴埋め

の財源が出でこない数でしたね。

ところが、総合学科高校は必ず設置をする。単位制・多部制も出てくる。でありますから、これはトータルして、いったいどれだけの効果を考えているのかという、そのようなことを知りたいわけです。

だから今の、しかも6の中の追加説明の中で、全体の懐が苦しくなっているんだからということで、実際は高校教育にかかわるのも、数字的には随分と落ちてはきているんですね。ただ、ほかの予算の落ち具合に比べると落ち率が悪いから、この占める割合だけは、22. また 23. という大きな数字になってきている。だからこそ我々が与えられた制度の(2)も、これは大事な問題だと思うわけです。

その大事な問題でも、この資料7だけでは、全然そのあとが推し量れないわけですよ。トータルした効果のことも提示がないから、そのような、求めているものに対する誠意ある資料提供が当然です。

だからこれは、今すぐは無理になりますから、次回の課題とお願いをしておきたいと思えます。

(吉江高校教育課長)

今、青木委員さんからご提案をいただきまして、それで実は前回の委員会の折にお話しいただきましたので、取りあえず私どものほうで、先ほどご説明いたしましたように、最終報告書の資料の「P.16」の中のものを加工させていただいたということで、お示した次第でございます。

この関係につきましては、県議会におきまして、県議会の常任委員会であります文教委員会におきまして、例えば具体的な金額とかそのようなものが出ないのかというようなご指摘をいただいた経緯がございました。それで、その折にも私どものほうでお答えいたしましたのは、具体的に今まさしく青木委員さんからお話がございましたように、教育をお金で語るなというご議論もあります。

またそれとは違う一方、現在、統合の対象ということで、幾つかの学校名をお示しているわけなのですが、これは、私どもはあくまでも検討材料というスタンスで、これは当然変わり得るという視点で考えておりますものですから、そうした場合に、あまり現在お話しいただいたような形での資料というようなものを出したりしましても、さらに内容的に不確かなものになってしまうというような危惧(きぐ)をしております。

数字は出しますと、どうしても独り歩きをしてしまいますので、例えばいくらくらというような数字を出した場合に、あたかもそれが初めにあるというような形で、またその数字自体も、制度の問題としまして、今後変わればどんどん数字も変わってまいります。それを考えた場合には、私どものほうとしましては、でき得れば各推進委員会におきましての議論がある程度固まって、報告をそれぞれの委員会からいただいた上で、いわゆる実施計画なりの発展の段階において、お示ししていきたいというようなこともお答えしてきた経過がございます。

今ちょっと、委員さんからお話しいただきましたんで、ちょっと現時点において、今はそんな状況であるということをおくみ取りいただいた上で、私どもとしまして、ほかに何か出せる資料があったら、つきましてはまた次回に向けて考えさせていただきたいと思

いますが、場合によりますと、いわゆるご要請いただいた内容どおりのものはお出しできないかなという気がしている次第でございます。

（青木委員）

おっしゃるとおりだと思いますけれど。でも私は、だから「お金が掛かることは嫌だ」と言っているわけじゃない。資料13のようなものが前回出るから、確かめるために私は、ただそれを出してくださいと言ったわけです。誰だって。まあ課長さんのおっしゃることであつたら、前回こんな資料を出さなければいいんですよ。出たからそれに対して申し上げているだけです。魅力ある高校づくりで話さなければいけないのはこちらのほうで、例えば、それに伴う資料がほしいということです。

（吉江高校教育課長）

資料6につきましては、ほかの委員会におきましても、県の財政状況等はどうだ、というお話しもいただきましたものですから、18年度以降の教育費予算のほうはお示ししていないのですけれど、これはあくまでも過去の10年ほどの推移ということで、お示した次第でございます。

そのようなことでありますので、その資料自体でいろいろ語るとかというような意味合いではない。ただ、しかしながら、今お話しいただきましたように、県全体の財政はどうかというようなお話は、実はほかの委員会でも出ておりまして、そのような意味合いでお出したというようなことではございます。

（中村委員長）

青木委員、よろしいでしょうか。

（青木委員）

わかりました。

（中村委員長）

今のものに関連して、最初の報告書資料の16ページのこの資料で、いろいろなシミュレーションができるということですね。でもここには、総合学科高校にどれだけお金が掛かるかは説明がないので、その辺は、資料があつたほうが良いという気がしますが、いかがでしょう。

（丸山委員）

今、委員長さんおっしゃったように、このような資料を出していくとしたらいうのと、もうひとつ、総合学科をつくる、多部制・単位制をつくるということですね。これは例えば、総合学科といえば、県からいう4つの地域では、この1年間で2つの学校を統合しているというようなことがあるわけです。そうなればひとつ使う校舎という総合学科をつくるために、高校もそのままではできないはずがない。

それからもうひとつ、総合学科ではなくても、県の、出してきたそのたたき台の案とい

うのは、つまりAとBの高校を合わせて、それぞれの特徴を生かした新しい学校をつくると、こういっているわけです。

そうするとその新しい学校をつくるということは、そのA高校の施設や設備やそういったものを、そのまま使うわけではないわけで、プラスするわけです。それでいったら、大変お金が掛かる面もある。そういう点も含めたものでないと、何かこの資料だけだと「2つを1つにしちゃえば金が掛かりませんよ」みたいなことだけで、非常に誤解される面もある。そういう大事な面の資料をなんかも、事務局は公平に出していただきたいと思います。

（中村委員長）

あまり細かく積算しますと、まさにお金で語ることとなってしまいますので、総合学科高校等の資料をいただいて、こちらで判断するようにしたいと思いますが、そのぐらいでよろしいでしょうか。他にご質問等ありましたらお願いします。

（森野副委員長）

最初に松澤教育長職務代理者のお話の中で気になったのは、中高一貫教育というお話がございました。そのようなものが出されたところがあるというお話でした。そういうのも、もう少し具体的にお聞きしたいと思うんです。といいますのは、これはやはり全体的に、高校改革の中で、あらためてどのようなものであるかということです。それで、以前に県で示されました中高一貫教育、併設であるとか統合であるとかいろいろありましたけど、そのようなものを、やはり私は、県立中学というものを、ここで考えていただいて、中高、それで高校改革と一緒にみていただけないものかなと、提案を申し上げるのですが、ちょっとお話ししたいと思います。

（中村委員長）

事務局、お願いいたします。

（吉江高校教育課長）

冒頭の、松澤次長の発言の中に、中高一貫のお話はなかったかとは思ったのですが、森野委員さんからご指摘いただきました、今の中高一貫の関係で申し上げますと、今回も最終報告の中には、中高一貫教育について言及されております。

最終報告の中には、中高一貫教育が入っておりまして、とりわけ県立高等学校と、市町村立の中学校との連携の形での中高一貫の導入がいかにかというような表現で入っております。

委員さん方は、場合によりましてご案内のあまりない方もいらっしゃるかと思いますので、中高一貫教育につきまして申し上げますと、中高一貫教育は3種類ございまして、ひとつは中等教育校といっているのですが、1学年から6学年までありまして、前期が中学、それで後期が高等学校というような位置付けで、1から6年までであるというようなひとつの学校形態です。

それともうひとつは、併設型と申し上げておりまして、いわゆる県立の中学校を隣に含

めまして、そこと県立の高校とを、並んで、いわゆるほぼ全入で入っていただくというような形態です。

それともひとつが、今私が申し上げましたように、市町村立中学校と県立高等学校を連携ということで、試験制度を非常に簡素化いたしまして、入っていただいて、それでまた、中学と高校との関係で申し上げますと、そのような相互交流するとか、あるいは中学生と高校生も相互交流で、いろいろな行事その他も行ったりとかいうような形でございます。

長野県におきましては、平成 12 年ぐらいに、確かにお話がありましたように、若干研究というようなことで、研究実践というようなことをやりまして、報告をいただいたような経過もございました。しかしながら平成 13 年には、ご案内のようにいわゆる大通学区制に移行するというような意味での検討委員会を立ち上げて、またその後、今回の高校改革の検討というようなことで、そこに委ねるような形になっている次第でございますので、今回は、今、私が冒頭で申し上げましたような、主に最終報告で取り上げてくれておりますのは、連携型の中高一貫教育校の導入でどうかというようなお話がありますが、その辺も含めて、ぜひ魅力ある学校づくりではご議論いただきたいと思っている次第でございます。

（小山（壽）委員）

今の発言にかかわってくるのですが、中高一貫教育の検討委員会に際しましては、早期に中高一貫教育を導入すべしと、このような報告をいただいていたんですが、長野県はまだひとつも実現していない。今、この高校改革プランの中においては、連携型に限って報告書で研究している、このようなお話が出ました。

8 月に出された中間報告は、全く中高一貫校については触れていなかった。最終報告で、入れていただいたということなのですが、連携型以外に中等教育学校、それから併設型の中高一貫校については、魅力づくりの中で考える必要はないのか答えていただきたいと思えます。

（中村委員長）

事務局、お願いします。

（吉江高校教育課長）

今お話しいただきましたように、昨年の 8 月 30 日に出されました中間まとめの中には、確かに言及してございました。また、その後の地域懇談会やあるいは懇話会の中でのご意見の中で、ちょっとその部分が魅力ある高校づくりの中で抜けているのではないかと、というようなご指摘をいただいておりますので、そんなことで、中高一貫につきまして最終報告に入れさせていただいた次第でございます。

それで、ここの中に、確かに言葉としましては、先ほど私が申し上げましたような連携というようなものをメインにして、このようになっておりますが、当然「など」というような表現の中で、今、小山委員さんからいただきましたように、それ以外の選択肢は、当然ながら議論としてはおありになると思っておりますし、そのようなものが具体的なお話として出てまいりましたら、それにつきましては事務局で今後検討する内容かと考えてい

る次第でございます。

（中村委員長）

よろしいでしょうか。

ほかにご質問はありますでしょうか。

（中沢委員）

2点、お伺いしたいと思います。

先ほど次長からも説明がありました、高校改革プランに対する県議会の決議というものがあつたわけでございます。そうした中では、いろいろ混乱しているから白紙撤回をしてみたらどうかとか、あるいは、より県民合意を得られるような、慎重な検討が必要ではないかというような提案も、なされているわけでございます。そしてまた、私ども町村長との懇談の中でも、具体的な高校名を示したということは、生徒や保護者、教育者に本当に混乱を招いているもので、教育委員会として十分な説明責任があるよというお話も出たというように理解しているわけでございます。

このような状況の中で、今、県から指定されたというか、一応の案としたそのようなものについて、どのように考えているか、あるいはこれを本当にもう一度白紙のような形で対応するというようなことができないのかどうか、その辺が1点でございます。

2点目は、より具体的なお話として、多部制・単位制高校ということが提案されているわけでございます。このような提案の中で、例えばこのような学校そのものも、新たに情報システムとか、あるいは工業科とか。そのようなことの学科というか、コース設定も、あらためて構築していくということを考えていくのかどうか。

その辺の考え方をお聞きしたいと思います。

（中村委員長）

事務局、お願いいたします。

（松澤教育長職務代理者）

中沢委員さんからご質問がございました、今回の県議会の審議経過ですけれども、高校改革プランに関しては、議会の中では、このことについて一般質問とか、委員会でもいろいろな論議がございました。私どもがご提案した再編整備案について、私どもがお答えしたのは、あくまでも各推進委員会において議論を進めていただく上の検討材料であると、そういうことで、お示しをさせていただいたということです。

このことについての質問で、それではこのことについて、各推進委員会で検討した結果、内容が変わるということはあるのか、それについて県教委としてはちゃんと受け止めるのかというようなご質問がございまして、私どもとすれば、議論を深めていただく上でのたたき台としてご提案をさせていただいたと。

各推進委員会でも、それを先ほどちょっと申し上げましたように既に3回ほど進んでおりまして、それはそれとして受け止めると。その中で、これは参考にして議論を進めるのだと、このような姿勢で進めていただいておりますので、結果として当然いろんなご提案



が出てくる可能性は十分あると。その中で変わってくる可能性は十分あるので、それはそれとして県教委としては、あくまでもあり得ることであるし受け止める、そんなようなご回答をさせていただいております。

それで、今回の論議が、非常に拙速であるとか慎重に審議を進めろとか、そういう点でございますので、私どもは慎重に進めるということは当然でありますし、やはりいろんな面で、県教委として説明責任を果たしていかなければいけないのではないかなというような指摘もございまして、各地域でご要望があれば、十分そういうものに対してお答えしていく用意もあるということもお答えしております。

先ほども申しましたように、各委員会としての受け止めもあるわけでございますが、ひとつの検討材料として受け止めていただき、各委員会で議論を深めていただければ大変ありがたいということでございます。

もう1点のご質問、多部制・単位制に関連したそれについては、吉江課長から申し上げます。

(吉江高校教育課長)

多部制・単位制につきましては、いわゆる単位制でございますので広い意味では総合学科高校も単位制でございます。

そんなこともございますので、総合学科高校も例えば塩尻志学館の場合等、8系統というような形で、幅広く展開しているわけです。多部制・単位制の中でそこまで大きな形での選択科目ということには、もちろんならないと思っておりますけれども、今ご提案いただきましたような形で、すべてがすべてというわけには当然とならないわけですがある程度以上、それぞれの地域に取り入れるとか、あるいは今後必要なものが何であるかという議論の中で、コースというような形での検討は可能かと考える次第でございます。

(中村委員長)

中沢委員、よろしいでしょうか。

資料1にある富山県立志貴野高等学校の例では、学科は3コースですか。もっとありますね。夜間まで含めるとたくさんありますが、科の数とか、そういうものの制約はないのでしょうか。

(吉江高校教育課長)

基本的には、幾つでなければいけないというようなものはございません。それについてはある程度はバリエーションがあるかと思っています。

(中沢委員)

このような多部制・単位制を提示するときに、どのように特徴つけるかが大きな課題になると思われまますので、そういうものを前面により出していかないと、何か定時制の集合体のような形でなり得る。そうではなく新しい発想で、単位を中心にいろいろ多部制のメリットを生かしながら、新しいコース設定の中で子どもたちが希望の持てるような、イメージづくりというか、内容に努めていかなければいけないのではないかと思います。

(中村委員長)

中沢委員がおっしゃるとおり、これこそ地域で、魅力づくりで、地域に即した内容になってくるのではないかと思います。それをこの場で議論していきたいと思います。

(青木委員)

今の中沢委員さんの関連でありますので、付け加えお聞きしたいと思いますが、中沢さんのご質問の中で、吉江課長のほうは、地域で要望があるならば説明に出掛けても構わないというお話ですが説明責任を果たしてほしいと思います。

ただ、要は「たたき台」、検討材料と言えども、それこそまさに県教委が示した具体的なお話だと思います。とりわけ、かなり前にある計画、その関連地域では、相当ひっくり返すような騒ぎになっていることは実情であります。

その中で、2007年度からの募集の話が出ておりますが、現実にはもう2006年度から、いったい子どもたちは選択肢の中に入れるべきなのかも話していかなければいけないのかということ。子ども自身幼い心で、もう考える立場にいることも現状であります。

というようなことがあるならば、検討材料ということでも済ますのではなくて、やはり名前が挙がった地域に、県教委のほうから説明を受ける側が、どういうストレスを受けるのか私もまだまとまりません。中には同窓会であり、地域の市教委であり、また中学生という受験を目指す中学生現場であり、いろいろ考えられるでしょうけれども、そのようなところに説明をすることが大事な責任ではないかと思います。

そういうことをしておいた上で、私どものほうは与えられた、皆さんからいただいた資料を基に、新しい検討材料として魅力ある高校づくりということを考えていけるといいます。それまでの説明責任をしていただけるのかということも、課題でありますのでお聞きしておきたいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

私どもといたしましては、先ほど教育次長からも申し上げておりますように、基本的にはあくまでも検討材料ということでお示ししてあるということでございますので、仮に積極的にそのような会を、私どもとして設けてご説明をするような形だと、その位置付けが本当に検討材料なのかというような議論が、ちょっと強まってしまうような点は危惧(きぐ)してはおります。

しかし、例えばの話が、ある地域におきまして、こういうことについて説明に来てほしいというようなご要請をいただければ、私どもといたしましては積極的にご説明に伺いたいと考えております。

過日も、ちょっと形態は違いますがたまたま下伊那地域でも会合がございました折に、私が出掛けさせていただいたわけですが、そんなことで積極的に対応させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

(中村委員長)

今、青木委員の中ででたのですが、中学生の思いを私は聞きたいと思っています。そのような機会を設けるということはできませんでしょうか。

アンケートのようなもので構わないと思いますけれど、積極的に説明の場を設けることは教育委員会ではできないということなので、中学生の意見というのはどうでしょうか。

高校生の意見は報道されて、たくさん聞こえてきますが、中学生の意見は少ないような気がしています。

もちろん最終報告等への意見は出ていると思います。

この再編案が提示された後での話ですね。もう2年生が受験の対象なっていますので切実な問題だと思います。

(小山(壽)委員)

実は、7月から既に高等学校、中学校の教頭先生あるいは進路担当の先生に向けての進路説明会が始まっています。

過日、校長会で理事会がありまして、校名を挙げた再編整備候補案が出された時点で、来年度の募集がなくなるんじゃないかということも含めて、いろいろに中学校に不安が広がっているという話を中学校の校長先生方からお聞きしました。

理事会として、中学校の各地区で開かれる進路説明会に、高校教育課からもぜひ出向いてほしいと。高校教育課として、来年度も当然のことながら校名の挙げた学校についても募集は行います。当然今は検討中でありますので将来何年後というところまでは当然言えませんが、当面の間は募集は続いております。

それから、入学してきた生徒については卒業まで必ず責任を持つということ、高校教育課として説明をしてほしいです。当然高校の校長先生たちは、中学校に向けて説明をしています、それだけではやはり不安を解消できません。

そんなことを要望してあります。

(中村委員長)

事務局のほうでお願いいたします。

(吉江高校教育課長)

今、小山(壽)委員さんから話を伺いましたように、高校現場とすればそのような形でお願いしているところでございます。

それが中学生の関係につきましては、実はなかなか難しい問題がございます。ある意味それぞれの地域によっても違いますし、また反面的に私どもがこういう案について、どうのこうのという形で、あくまでも先ほどもお話し申しあげましたように検討材料という位置付けのものでお出しした内容について、例えばの話が意向をお伺いしていくというようなことについて、いろいろ積極的に対応することになるかなというような気はしています。

しかし、それぞれの学校現場に寄せられているご意見、それはいろいろな形で伺っておりますし、私どものほうにもいろいろな形でご意見をちょうだいしておりますが、今の

ところ、私どものほうに直接入ってくる内容につきましては、中学生からのご意見という  
か保護者からのご意見はそれほど入っていないのが現状でございます。

ただ、しかしながら各学校におきまして、とりわけさまざまなお話が出ている学校にお  
きましては、いろいろ中学校等からのご意見が出ているというようなことは、分かってお  
りますものですから、それにつきましては、しっかりと各学校でそれぞれ適切な対応をし  
ていただくことを各市町村さんをお願いしたいと思います。

(中村委員長)

分かりました。

ありがとうございました。

(小山(元)委員)

各地域で、やはり第1課題として見ている問題でありまして、先ほど小山校長先生のほ  
うからも話されたように、その地域の高等学校の方々中心に、非常に大事にこれからどう  
いうような方向になるかということは説明をしていただき、特に同窓会、PTAの関係の  
意見を聞きながら審議のほうをいろいろお話していただいております。

先ほど話にありましたように、中学校関係の保護者が非常に心配するのです。学校長を  
とおして、それぞれ話をしてありますが、やはり直接子どもを持っている親にしますと、  
どうなるのか非常に不安なところはあります。

このことは、大事にお話いただいておりますが、やはり地域としましても学校関係の皆  
さま方が、そのように大事に考えていただいておりますありがたいですが、我々行政関  
係にしましてもそういう保護者、地域の親たちの気持ちを大切に、地域を挙げてあらゆる  
立場の方々に、集まっていただき、その中に学校関係者、保護者関係の人たちが入って、  
これからの高校の授業、高校の在り方はどういう方向がいいのだろうか。そういうこと  
を考えることを、一番大事にしているわけですし、それを計画したわけです。

そういう会のところでも、今、県教委からお話、説明に来てくださるということをお聞  
きしたもので、もし要請を申し上げれば来ていただくことができるのかどうかお伺いした  
いと思います。

以上です。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

先ほども青木委員さんにお答えいたしましたように、ご要請をちょうだいすれば、私ど  
ものほうでしっかり対応させていただきたいと思っております。

よろしくお願いいたします。

(宮本委員)

先ほどから中学のことが出てきておりますが、保護者からも先程出たような話が出ました。それと夏休みに体験入学がありまして、常に子どもたちの希望を取りまして、ニーズが把握されています。

実はこの具体的な校名が出る前に、既に希望がありましたが、その後から具体的に名前が出た高校を希望する生徒が不安がりまして、具体的に言いますと部活動で私たち中学3年が一番最後に入ったときに後輩はいないのかとか、野球部に入りたいんだけど最後3年になったらどうなるのかとか、いろいろありまして私たちも答えられないものですから、今後名前が県教委のほうでは変わるというような、たたき台がということもありますけれども、しかしながら高校を具体的に出てくるということも、もちろんありますので、今後の推進の日程ですが、それについてははっきりと分かるように説明できなければいけないと思っております。

もうひとつあるのですが、先ほど冒頭に県会の文教委員会で決議がなされたということで、慎重に検討をするということがありましたが、大事に受け止めていただいていると思いますが具体的に慎重とはどのようなことでしょうか。例えば期間をずらすのか、今、話があったように説明会をするのか、具体的にはどんなことを考えているのか、この慎重という意味を、どうとらえているのか県教委の見解を聞きたいのです。

どうでしょうか。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(松澤教育長職務代理者)

今回の決議の決議文の中、やはり議論を慎重に進めなさいということについて、強くご要望がございました。ただ期間のスケジュールにつきましては、私ども当面年内にご報告をいただきたいというご説明をさせていただきましたし、スケジュール的には現在3回目くらいの審議にいたっておりますので、何回やれば十分かという議論もあろうかと思いますが、当面は年内10回から12回くらいの審議を進めていただきたいと思いますと思っております。

議論の中で出てきた十分説明をしていきなさいというお話につきましては、今ご論議していただいておりますように、各関係の学校等々で説明をしてもらいたいというお話があれば、十分こちらの考え方は説明を申し上げるというようなお答えをしまいいりましたので、当面は今までの方針が大きく変わっているわけではございませんが、いろいろ県教委としての説明責任を、きちっと果たしていくというよう進めてまいりたいと、そのように思っているところでございます。

(中村委員長)

推進委員会の方もですが、月1、2回の開催ということでスタートしましたが、2回にさせていただいて、委員さんご協力を得ながら、疑問点は徹底的に解消しながら進めていきたいと考えておりますので、委員の皆さんのご協力を得ながら、回数の点も含めて慎重にや

っていききたいと思います。

(若麻績委員)

若麻績でございます。

前回の時も中学生を持つ親の立場から、学校名を出されたことはやはり慎重さに欠けたのではないかという認識であるつもりであります。

やはりその学校現場、子どもたちの気持ちというのは、相当このことで揺らいでいるのではないかと。この間も、市のPTA総会がございまして、その際にも学校名を出された地域を担当されている会長さんは、大変困られていて、どう対応していいのかということに先行きが見えないというような感じでございました。

その中で、県教委として出された以上、私としては出す前に、たとえば中学2年生、1年生が学校へ行ったときにどのような教育が受けられるか、また学校環境がどうなのかということを提示してから出していただきたかったというのが希望でありました。

出た以上、受験に際して、それから入ってからの、先ほどの部活の問題、それから先のことについて、ある程度の方向性を3年、5年後を含めて提示していただければ、より分かりやすい内容になったかと思います。

今からでも、やはりそれについて、説明責任ということを含めていただきたいと思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

清水委員お願いします。

(清水委員)

2点ほどあります。

まず1点、はっきりさせていただきたいと感じていることは、学校名が現在出ているわけでございますが、それはあくまでもたたき台だというお話。このたたき台という意味合いが、いまひとつ私には理解ができないのです。これは果たして学校名が変わるのか変わらないのか、変わる要素があるのかということです。

それからもうひとつは、当面年内というこの当面という信憑性ですね。現に1年間かけて、月に1回から2回こういった委員会を持って協議をした結果、話がまとまらないということになった場合には1年は延びるのか、延びないのか、その辺を明快なお答えをいただきたい。

(中村委員長)

それは事務局の見解としてですか。

委員長としては、たたき台という意味合いは、我々この推進委委員会で、別の名前の候補が挙げられれば、それも説明をしながら取り扱っていききたいなと思っております。例えば今、名前が挙がっている学校で魅力づくりをしていきたいのですが、でもこちらのほうがいいんじゃないかという意見が出る可能性もあります。

そういった面では、県の教育委員会が示していただいた案がたたき台という、そういう意味にとらえています。ですから、あくまでも推進委員の皆さんが、発言をされるかどうかということだと思います。そういう時間も含めてあと10回か12回、その中で議論がまとまっていけば、慎重に審議をしながら、まとまっていけば、たたき台に対して対案と言ったらいいのか、推進委員会の案を示していくことができるというふうに考えています。

それにはやはり魅力づくりに関して、総合学科や、多部制に関して、皆さんと少し意見交換をして、イメージを共通に持っていただきたい。前回あたりから魅力づくりの議論をしていただいています。

事務局、そのような解釈でよろしいのでしょうか。

(吉江高校教育課長)

いわゆる今回お出ししました校名につきますでの考え方は、委員長さんおっしゃられたとおりでございます。それで今後のスケジュールにつきましても、おっしゃられるとおりということで私どもも考えております。

ただ、若干付け加えさせていただきますと、年内、当面年内という言い方をしておりますのは、この年内が若干年の初めくらいまで入り込んで、それはそれぞれの委員会ごとの審議状況によりますので、当然ながらあり得るという前提で考えております。

しかしながら私どもといたしましては、いただきました報告をうけて実施計画をその後策定するわけですが、それにつきましては年度中に、ぜひ実施計画を策定してもらいたいということで、現時点では考えております。

そう申しますのは、平成15、16年と2カ年度、まるまる費やして17年度のこういうような推進委員会も、立ち上げまでもう既に費やしてしまいました。それでこの今年1年度を費やしたとしまして、具体的に先ほど来お話がございましたように、募集の見直し。募集の見直しがスタートするのが、さらにもう1年もかかります。検討を始めてから既にそれで4カ年もかかってしまいます。

それとその募集の見直しをして、恐らくそれぞれの学校が最終形の、いわゆる皆さま方のご検討いただいた内容で、全く新しい形態になるには、さらに在校生の関係もございしますのであと2カ年度は要するかと思います。

そうしますと、私どもは検討をスタートいたしましてから、都合6カ年度かかるという状況でございますので、やはりある程度の期間を区切って、そのスケジュールを見据えながら実施してまいりたいというようなことを考えている次第でございますので、よろしくお願いいたします。

(中村委員長)

よろしいでしょうか。

ほかにあれば続けてお願いしたいと思います。

( 清水委員 )

先日の中学生のお子さんを持つ親御さんのお話を伺ったのですが、あのよういったん学校名が出てしまったことについて、あらためて「これはたたき台だよ」と説明をしました。しかし、その親御さんは校名が出ていると、そこへうちの子は受験させないねということで、やはり中学生を持つ親御さんの感覚というのは、そういうものなのかなと感じました。

たたき台ということですが、校名が出てしまったということは、本当に至る所に方に大きな波紋があるんだなと感じました。

( 丸山委員 )

2 つとありますが、今、出ていることについての時期の問題ですが、基本的に地域や現場や父母、生徒の意見を聞きながらということが基本的なスタンスだという、検討委員会が出された最終報告で出されていますね。そうすると、必ず特にこの第一推進委員会の担当の第一通学区は、幾つかのところがあるわけで、部会を開いて地域の意見を十分聞くということが必要で、この会が月に2回やって十数回やるだけでは済まないわけです。それは誰が考えてもそうです。

そういう点ではやはり慎重にと、そういうことが含まれています。最初からそのように日程を決められると大変困ります。地域で部会を開くといっても相当時間が掛かります。どういう人を集めて、どういう意見を聞くかということ、だからその時期については、県教委も、事務局の考え方からすればそうでしょうが、きっちり決められると非常に困ります。そこをぜひ我々のある自由さを残していただきたい。

それからもうひとつ、今起こっている名前が出てきたことに対する不安の問題ですね。それは私の地域でもいっぱいあります。私の学校でもいっぱいあります。うちの生徒もそうですし地域もそうです。それは具体的に言いませんが、それについては確かに地域で呼ばれれば説明に行きますということですが、それはもちろんそのとおりだと思いますが、やはり公にマスコミを使って、県教委がきちんと不安について解消するように説明をきちんとすべきなんです。それは県教委はやっていないでしょう。

新聞の報道で、14校廃止になんていう非常にセンセーショナルな報道になってしまったわけです。それについては、やはり県教委がこれはこういう立場でこういうことを言ったんだということを、県会の答弁や新聞報道を通じてとかありますが、きちっとした責任者が説明責任として、こういう不安があるようだけどそれは大丈夫だと。こうだから不安を持たないで、しっかりがんばって勉強してくれということを、きちんと子どもたちに向かうような言葉、あるいは保護者に向かうような言葉で県教委が説明すべきだと思います。

そのところを本当にやってほしいのです。それが県教委の責任だと思います。もし名前が挙がった学校が、来年の募集で定員割れを起こしたりしたら、わたしははっきり言いますが県教委の責任は大きいと思います。

( 中村委員長 )

事務局、お願いいたします。



(吉江高校教育課長)

今、丸山委員さんからそういうお話もちょうだいいたしました。今までもずっとこの県議会におきまして、私どもはここでご説明をしてきたようなことは、お話ししてきた次第でございます。

それからもう1点申し上げますと、確かに校名の議論につきましてはいろいろなご意見があるかと思っておりますが、ただそれぞれの4つの推進委員会におきまして、やはり私どもがお願いしているのは、具体的な校数の議論をしていただくということなのです。

そうしますと、結果的にそのやりかたにつきましていろいろなご批判はあろうかと思いますが、なんらかの形である時点におきましては、それぞれの委員会におきましてその議論がなされざるを得ないと申しますか、そのような時期というものが、どうしてもあろうかとは考えている次第でございます。その時期が、果たしてこれからもちろんこの委員会におきまして、私どものほうの検討材料をベースに、いろんなご議論をいただくわけなんですけど、その議論が深まる時期がいつなのかということを含めまして、やはりどうしてもそういう意味では、私どもは基本的にこれから入学される生徒さんをどうフォローするか、またそれについてどう責任を持ってやっていくのか。またさらにそれにつきまして、中学校に対してどのようにご協力をお願いして、しっかりと支援する体制をつくっていくのかということに、まずこのような点につきまして、お願いしていこうと思っているのですが、どうしてもこういう議論の中では、そういう場面がつかまってしまうというようなことにつきましても、ご理解をいただければと思っている次第でございます。

(宮本委員)

今、委員会の話をしていますが、事務局にお願いしたいのは、委員会の開催は12月までなのか、また今、丸山委員さんから出ておりましたが、部会を開くのか、開くのであれば、大体どの時期に、どういう設定で行うのかということをはっきりしてほしいと思います。

今までどうも総合学科とか多部制とかいろいろな説明を県教委から受けながら、少し皆さんの意見を出していただいているわけですが、大体どういう時期に具体的な高校名を挙げていくのかとか、そういう委員会としてのスケジュールみたいなものも、少し委員会の中で詰めておかないと、毎回、今日は何をやるのかということではなくて、ある程度推進の日程みたいなものも、委員会の中で話し合っていきたいということです。

(中村委員長)

今日、そのように提案をしようかと考えておりました。

どうしても最初に皆さん方と、意見交換をしておかないと、総合学科とか、多部制・単位制に関する具体的な内容、用語の理解がある程度一致をみていないと解釈の違いなどもあって擦れ違ってしまうと思います。

それと進め方に関して、これで3回目なのですが、我々の推進委員会の課題は、魅力づくりとその他も含めて4点あります。まず始めに魅力づくりが挙がっています。ですからそれに関して、しばらく議論をしていく。その中でやはり第一推進委員会というのは、ここが特定の地域でありますから、魅力づくりの話し合いの中に地域の特徴が出てくると思うんですね。それを第一推進委員会が担当している高校の中で、システムとして魅力づく

りを考えていく。具体的な校名をいきなり挙げるというわけではなくて、多部制・単位制をどのあたりに配置したらいいのか、あるいは総合学科をどうしたらいいのかというのは、やはり全体で考えなければいけないというふうに思います。

部会で議論をしたほうがいいのではないかという意見もありますが、部会になってしまいますと、それこそ単一の高校名を挙げてという、全体で考えていくというふうにはいかないと思うのです。ですから、最初のところは少しまどろっこしいこともあるかと思いますが、全体的なシステムとして魅力づくりを皆さんで議論いただきたい。

具体的に細かいところといいますか、最終的な判断をするのはもしかしたら部会のような形で詰めないといけないという面もでてくると思います。これはあらかじめ議論の日程をこのくらいで、というふうには決めることはできるんでしょうけれど、皆さんのご意見次第では誤った予測になったりし、慎重に審議しなければいけない面がでてきたり、そういうふうになっています。

そろそろ3回目ですから、最終報告の内容については十分ご理解をいただいてきた頃かなというふうに思いますので、魅力づくりに関して地域性の話しも含めながら、ご議論していただければと私は考えています。

(小山(壽)委員)

慎重に考えていくということについては、当然そうでなければいけないし、また考えていく中で、中学生、あるいは高校生の不安を解消していく、結局そのために力を尽くしていくということは一番大事なことだと思う。ただ議論の出発点で、改革プランの中で、学校の魅力づくりというのと、それから少子化、財政難というような状況の中で、校数を一定程度削減しなければいけないということで、一方においてはあった訳です。その両方が、同時に進められていかなければいけないのではないかなというふうに思っています。

それから統合としたときに、財政難だけが、お金の問題だけが先に、青木委員さんがお金の問題が先かというような話をされましたが、必ずしも学校現場ではそう思っていない。お金の問題は当然お金の問題としてあるんですが、生徒のクラブ活動とか、あるいは生徒会行事、あるいは生徒数、学級数が減れば当然それに応じて教員の数が減りますので、教員加配を含む、多様な選択科目で習熟度別授業が難しくなる、そういう問題がありますので、当然一定程度のサイズが必要ではないかなという思いを持っています。

したがって当然、長野県は広いし、交通の問題がありますので、なかなか通学を考えたときに、小規模になったからといってその学校は魅力づくりが難しいからなくしてしまえという話しにはならない。どうしても残さなければいけない学校というのはある。ただそれと別に、ある程度一定の交通の利便性があるという、そういう前提の中で考えれば、やはり一定の学校のサイズというのは、魅力づくりの前提として必要ではないかなというふうに思っています。

しかし、再編整備候補案が示された時期がどうであったのかという問題はあり、あの時期であったので非常に混乱を招いたという批判もあり、逆に再編整備候補案が11月、12月の志望校を限定する時期に出されたら、さらに大きな混乱が生じたかもしれないというような恐れもあります。なかなか時期の問題は難しいものがあるなというふうに思っているわけですが、一定程度のサイズは必要であるということはみんな認識しているわけです。

が、校名が出ると校名が出された学校は、ほとんどの学校で存続という形で論議をしている。

これはひとつには長野県の高等学校というのは前身をたどっていけば、旧制中学もそうだし、組合立の実科中等学校もそうであるし、これは県立移管してくるときもそうですが、校地、校舎をすべて地域が提供していたと。地域の財産としてつくられているわけですから、当然地域の方々が力を尽くして育ててきた、そういう施設でありますので、それがなくなるといって、どこか別の地区へ行ってしまふ、あるいは形が変わるということになれば当然それに対する反発が出てくるというのは、これは自然なことであるわけですが、しかし一方において高校生の教育という観点から見ると、極力一定の規模、一定のサイズ、これを前提にしなければ、なかなか特色づくりというのは難しい、そんなふうに考えますが、そこら辺についても同時並行的に議論をしていく必要があるのではないかと。

もうひとつですが、再編整備候補案はちょっと議会でああいう議決がなされましたし、議会というのは県民の代表者の意思表示であり、非常に重い話であるというふうに思っているわけです。再編整備候補案の中では、この学校を廃校にするということはひとつも書いてないわけで、この学校とこの学校が一緒になります。ただし、校地、校舎はここに来ます、という話になっている。

例えば、卒業するまで絶対に責任を持つという言い方をしたのは、校地、校舎が別のところに移るかもしれない、この在校生が卒業するまでは、当然一緒になる学校と一緒にクラブ活動、生徒会活動、教育課程もある種一緒に組んでいくということも、やりようでは可能であるので、それが具体的に実施段階になったときの工夫次第ではないかということで、ちょっと不安をあおっていくというようなところも問題があるのかなと、こんなふうに感じています。

（森野副委員長）

ただ今の小山さんのお話と関連させて、先ほど課長さんは、地域に出向いて説得し、説明するというようなお言葉をいただきましたが、果たしてどうなんだろう、いまの小山さんのお話ではやはり、地域で学校が存在するということは非常に大きいんですよね。ウエイトが高いわけです。だから学校をどうするかという問題は地域がどうなるかということまでいくわけですね。

ですから地域から高校がなくなってしまうと、今度は子育てにも関係してくるわけで、都市へ若い夫婦は流れていってしまうと。ですからますます過疎化が進んでいくのではないかと、そんなふうにも危惧されるわけです。それでお話しの中にもありましたが、伝統校というような学校が消えていくということになりますと、やはり私財を投じた村の人々の努力というようなもの、おれたちの資産が消えていくんだなというようなことで、どこも考えなくてはいけないのですが、ここで存続させるにはどうすればいいかということを考えてみますと、2 学級が下限であるということでした。もし 2 学級でないとしたらどうすればいいのか。これは 40 人が定められた数なのではないかと。あるいは 35 人とか、30 人の学級を編成すれば 2 学級は存続できるのではないかと、素人考えですが、存続というような意味で地域の願いを十分考慮してお答えいただきたいと思います。

(中村委員長)

事務局お願いいたします。

(吉江高校教育課長)

今、森野委員さんからお話しがございましたが、実は学級の規模について申し上げますと、私どもは40人をベースに考えております。極論を言いますと、120人のところを40で割れば3クラス、30で割れば4クラスということになるんですが、全体のやはりある程度の生徒規模というのは当然なことです。それで私どもが基本的に、確かに小学校でいきますと、小学校の4年生までが現在30人規模で、5、6年生につきましては市町村の教育委員会さんのご判断をいただきながら、負担金をちょうだいするようなことで、30人学級の一部導入を始めております。

ただ現在におきまして、中学においては30人規模学級は導入されておられません。やはり、教育におきましてもそれぞれの発達段階におきまして、生徒との交わり、社会、あるいは教師との交わりというのが当然あるかと思しますので、これから社会に出る、さらには仮に進学されても、大規模な集団となることには変わりありません。それを考えたときに私どもは基本的に今申し上げたような理由も含めまして、たまたま国のほうの基準が40人でございますが、それと結果的には連動するような形でございますけれども、40人で考えている次第でございます。

(塚田委員)

私は、先ほど小山先生が言われた意見はそのとおりだと思います。

まずひとつ、我々がこの委員会できっちりと、まず押さえておかなければいけないのは、県教委のほうで示したのは、あれはあくまでもたたき台で、我々があれに左右されてはいけませんので、あれを出してもらったのを、今度は我々が、それがいいとか悪いとか、こうしろ、ああしろということをやっていくんだと。そういうことをまずきちんと理解していないと、それこそさっきのマスコミに左右されて、みんなが右往左往してしまうというようなことになってしまうので、それをまず、我々はまず議論に入る前にそのところをきちんと押さえておくということが必要だと思います。

それからもうひとつ、小山先生が言われた規模のことですが、これもどうしたって当然なことだと思います。教育においてある程度の規模は絶対に必要だと思うし、この中にやはり絶対に経済というのが出てくる必要があると思います。先ほどの教育をお金で語るなというお話が出たんですけれども、私はそうではなくて、やはりスケールメリットということも当然出てくると思います。教育にお金を掛けることは大切だけれども、無駄に掛けるということは、やはり避けなければいけないことだと思うし、必ず有効にお金を使っていくということは、教育のところでも絶対に必要なことなので、やはり不必要な費用を削減するということもとても大切なことなので、これからの議論の中でお金のことはタブーではなくて、やはり話し合っていかなければいけないというふうに思います。

それからもうひとつ、時期のことなんですけれども、今年末がいいのかはちょっと分かりませんが、やはりどこかで期限を決めなくてはいい。十分時間を掛けてやってくださいということになってしまうと、いつ切ったらいいのかということになるので、

我々の目標としてもやはり、どこかで期限を切って、そこを目標に話を進めていかないと、失礼な話ですけどもだらだらという形が出てきてしまうと思うので、やはり期限を区切るというのは大切なことだと思います。それが今年の末がいいのかは、分かりませんけれど議論を進める上ではそれは必要なことだと思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

委員会の進め方についてもたくさんご意見をいただきました。

今日はまだ、多部制・単位制、それから新しく総合選択制というものもでてきていますので、その辺の質疑、あるいは認識を皆さんで持っていた上で、魅力づくりのほうへ本格的に議論を進めてまいりたいと思います。論点が幾つかこの中で示されていますので、次回は議論の項目を私のほうでまとめまして、議題として挙げさせていただこうと思います。資料の説明に関してはご質問等よろしいでしょうか。最初の事務局からの県議会の状況等の説明に関してもご質問等よろしいでしょうか。

質問の時間だったんですけども、だいが別のことでご議論していただきましたが。

(中沢委員)

こういった場でいろいろ論議されたものが、教育委員会がいろいろと方向性というものをつくり、高校の設置に係るものは条例設置と理解してもいいですか。議会の議決がいるとか、その点はどのようなのでしょうか。

ちょっと基本的なことでございますので、教えていただきたいと思います。

(中村委員長)

事務局お願いいたします。

(吉江高校教育課長)

関係する規則とか、条例とかはもちろんです。それで設置にかかわるものにつきましては、条例事項になりますので、当然ながらそういうことになりますと、議会の議決事項にはなります。しかしながら時期とか、いろいろな問題につきましては、それぞれ実はよその県の状況とかも、私どもが調べた中で実はいろいろなやり方がありますので、今後どのような形で、例えばの話が諸規定ですとか、諸規定の改定も含めてやっていくということは今後の議論でございます。

(森野副委員長)

多部制・単位制ということで、定時制も含めてなのですが、現在の定時制というようなイメージしか頭の中にございません。

それで現在を見てみますと、子どもの実態として少数で学べるよさというのが定時制にあったと思うんですね。これをマンモス化して坂城高校へ行くということになりますと、ますます通いたい子どもというものの、通いにくい状態になっていってしまうのではないかなと思われてならないのです。

学校出ていろいろ変わって、私はどうも経済優先、こんなような視点で考えられているのかな、あるいは都市化のせいなのか、あるいはいわゆるエリート化への道を進めさせているのかなと、そんなふうに思うわけです。ですから、坂城にいった場合、今まで通っていた子どもは、果たして通えるかどうかです。

私は牟礼にいますが、長野まで通っていた子どもが、信越線で長野まで定期が6,700円掛かるんです。それからまた坂城ということになりますと、時間的な余裕がありません。なお、交通費が掛かるわけです。そうすると学ぶ機会というのがなくなってしまうわけです。日の当たらない子どもというのがますます孤立していく、このような状態で果たしていいのか。

先ほどお金の話がありましたが、お金には換えられない、ひとの心というもののひとつ見ただいて、多部制・単位制について十分なご配慮をいただきたいと思います。

（中沢委員）

今、坂城という言葉が出てしまったのですが、私自身、多部制・単位制とか、あるいは総合学科とかいうものは都市にあって、幾つかの高校のそのひとつに、そういう機能を果たすということが一番大事だなと思っております。これからの論議の中でそういった、あるいは総合学科というのはどういうところがいいんだろう、あるいはまた多部制・単位制というのはどういうところがいいんだろうかという、そのベースを話し合いながら幾つかの、視点から進めていただきたいと思います。

ただ坂城ということになりますと、先ほどもお話しがございました、地域とともに歩んだ学校であり、伝統もあり、また地域の産業に貢献しているということでございまして、若者が集まる最大の場所でございますので、そういった面をまず考えていく必要があるんだろうなということでございまして、広くみんなで論議していただいて多部制・単位制ということそのものが、これからの検討の中でいろいろと基本的に考えていただきたいと思います。

それともうひとつ、何か指名された学校だけの問題であって、その他のところは、「あよかった」ということで、安心しておられるようでございますが8学級、9学級あるような学校はこれからいったいどうなる、そのまま残しておいて、そして小さいところだけに目を当てていくというようなこと、そういった面でのいろいろ教育委員会の考え方というのを出してもらわないと、なにか話が偏るというか、全体的なものにならないのではないかと、そんなふうに思いますのでよろしくお願いいたします。

（中村委員長）

休憩の時間をとりたいと思うのですが、今、多部制・単位制についてまさに議論をし始めていただいて、この議論を進めていきたいと思うのですが、まだ総合学科、それから今日新しく出てきた、総合選択制についても残っているかと思うのです。前回総合学科について少しお話しがありましたので、休憩の後は総合学科のお話し、多部制・単位制について今の議論の続きへ進めていきたいと考えています。

それでよろしいでしょうか。

(丸山委員)

それでいいですが、ちょっとさっきの説明責任の問題、我々が議論していくと、それは地域の議論として聞いた上で名前が出てくることなんで、全然状況が違う。今、出たことについては、今の不安についてはきちんと県教委に説明の責任があるということですね。

もちろんこの委員会も名前が出てまとめたら、説明責任もありますよ。だけど、少なくとも地域の意見を聞いているということだから、全然状況が違う。だからぜひ説明責任を果たしてほしい。

それは先に言うておきますので、あと議論はさっきの委員長のまとめで結構です。

(中村委員長)

私もそのとおりだと思います。

今名前が挙がっていない高校が、全然知らんぷりということではなくて、この議論の中でこちらのほうにこういう学校を設置していったらどうかというようなご意見も出て来ようかと思しますので、また名前が上がった高校に関しても、事務局のほうになぜそこのかという詳しい説明を求めたりもしていきたいというふうに考えています。

事務局からお願いします。

(篠原教育幹)

休憩を前に誠に申し訳ありません。

先ほど森野委員さんのほうからありました、多部制・単位制の件なのですが、ご心配のような部分ですけれども、多部制・単位制は基本的には全日制ではございません。定時制ということで、制度的に完備されると。仮にひとつの多部制・単位制を、やはりここで名前を言いながらというのはちょっと、坂城という名前は使わないでおきますけれども、多部制・単位制がきています。

再編整備候補案をご覧になっていただければ分かるように、すべてそこに定時制を統合するというふうには、当然になっていないのです。多部制・単位制をつくることによって、多部制・単位制のよさを生かす、よさを生かして、それに「これならば」という、そういう子どもたちは当然いるはずでして、そういう子どもたちをそこへ集めていく。ただし今までのような形の定時制がいいのだという、生徒たちもいると思っています。従って、そういう生徒たちのための、今までのような定時制はいろいろ魅力をつくりながら存続をさせていく。そんなふうにバランスをうまく取りながらやっていこうということでもあります。

それからもう一点、少数での学級、学びというご指摘がございました。非常に私たちはこの件については、実際に教室、生徒たちを前にして、現実的に悩むところであります。それは、いつまでも子どもたちが少数の中だけで生きているという状況は、何とか打破してやりたいという気持ちは当然、教員はあるわけです。このままがずっといいんだという、そういうわけにはいかない。3年ないし、4年を卒業すれば社会がある。あるいは大学生になっても、大学というところは、いろいろな地域から集まってくる、全国から集まってくる同じ世代の仲間とともに過ごしながら成長していかなくてははいけない。

そうしますと、少人数というもののよさ、これはもちろん全県の高等学校で教員は、持ち時間数が増えても、現実にはいわゆる少人数の学級を編成して工夫をしながらやっている

わけです。ただそれだけ、それがすべてでいいかと言いますと、やはりそうではないだろうと、つまり少しずつ、少しずつ少人数から大規模な人数へ、そういう中でも十分自分の主張ができる、自分の個性や能力を伸ばせる、そういった子どもたちになってほしいなと、そんなことを思っております。

私たちも、ご心配の向きもいろいろ苦にしながら、悩みながら進めているというふうな状況でございます。今までの定時制が全部なくなるという、こういう発想ではないということとはぜひご理解いただきたいと思います。

（森野副委員長）

長野高校と、長野商業ですか。

（篠原教育幹）

実はこの再編整備候補案、第1通学区では、これは「案」です。あくまでもたたき台ということなのですけれども、長野高校を残し、さらに長野工業高校を残すと、この2つの定時制を残すという「案」になっておりますけれども、あくまでも案です。そしてさらに。

（森野副委員長）

長野吉田高校戸隠分校はなくなりますか。

（篠原教育幹）

戸隠分校は、一応置かないということにしています。それから北の中野実業高校が統合されるという案になっていきますけれども、そこにも定時制を残していくと、そんなことでございます。

（中村委員長）

今のようなご議論を、ぜひ魅力づくりと並行してやっていきたいと思うのですが、25分まで休憩を取らせていただきたいと思います。

【休憩後再開】

（中村委員長）

それでは、委員さん方がお戻りですので再開したいと思います。今、多部制・単位制について議論がうまい具合にスタートしたのですが、前回総合学科について少しご理解いただいた続きで、丸山委員から資料を皆さんのほうにお配りしてあると思うのですが、この辺を少し丸山委員に説明していただいて、議論の参考にしていきたいと思うしますので、いかがでしょう、よろしいですか。丸山委員お願いいたします。



(丸山委員)

それでは、多部制・単位制の議論になりかかっているところを申し訳ないのですが、前回総合学科についての議論がありまして、最後のところで私も感じたのですが、私たちは仲間で、この工業高校研究協議というようなものをずっとやっています、この資料は第3推進委員の藤本先生が議長となって職業教育の教育委員会というのがありまして、それを出されていたもので、それを私のほうで了解を得て提出したものです。

たくさんありますので読んでいただければいいので、ぜひ資料のほうを参考にしてください。ポイントだけ説明していきます。

この資料の基本は総合学科が職業高校に変わり得るのかという点を中心に書いてあります。全国の状況などを含めて書いております。最初が字ばかりで申し訳ないのですが、最初の1ページ目は、1番は文部科学省の考え方などを書いてありますので、ご覧いただければと。ただ、特に2番です。総合学科の創立、寺脇研氏(1952年～：文部科学省の官僚、現職は文化庁文化部長)の講演というものがあって、これがかなり率直に述べられていますが、私なんかはこれでいいのかなと思います。ご自由にご覧ください。

特に今日説明したいのは2ページ目の、こういう総合学科がたくさんできてきているんだけど、変更してきているという点です。特に2極化していると我々は見ています。大学進学対応型と低学力生徒収容型というふうに呼ばれているわけですが、大学進学対応のほうにシフトしていったところは人気を集めている面もある。しかし低学力生徒を収容していくという形になっているところは、入学志願者が減少傾向になって募集定員割れなども出ています。統廃合といいますが、存続というような問題も出てきているところも出てきているところですよ。

その表の下に進学も就職の中途半端で、結果として専門学校への進学者が多くならざるを得なくて、進学学校、専門学校予備校論と言われていますが、そのようなことになっているという点で2極化しているというのがひとつです。その辺で進学校にシフトしていかなければ駄目だというようなところが、その下の四角やその次のところに例として書かれています。2番目のところ(2)の下の方ですが、希薄化する専門性ということで、いわゆる職業高校、専門高校の、総合学科との専門科目の選択の仕方を表にしています。

3ページのほうを見てください。ここに少しまとめてあります。これも字ばかりで申し訳ありません。いろいろな内容の特徴から、やはり実際にはすべて設置された科目が選択できるわけではないので、かなり専門性については薄まっているということが考えられるようです。そういう点では今度県が出したたたき台といいますと、工業科がああ地域からなくなっていくのか、というような問題はかなり議論しなければいけないのではないかと。工業科が長野工業1つになってしまうということでもいいのかという問題は、地域の産業化にとってもかなり重大であるというような、そのようなことも含めて専門性が非常に薄まっていくということです。

それから生徒の履修実態も、実際には取れるという形式になっているが、実際に選択科目を取っていくと、専門教科、職業教科については専門学校、職業学校の3分の1くらいしか取れないということになっています。それから職業教育の系統性が崩れるという問題。それから自己の可能性や生き方を求めていくほうが、主体的に進路を選択していく余裕はあまりないと、よく総合学科の中ではこういうふうに言われているわけですね、将来の職

業選択を視野に入れて自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視し、動機付けとして今ある科目やガイダンスの充実を図って、可能性や生き方を求めて進路を選択していくと言うのですが、実際には選択をする教科書の準備や来年度の科目の選択というのは、それぞれの前の学年の、1年でいえば、1年生の秋、夏から秋にもう始まるわけです。そういう点ではそんなに動機付けの科目をじっくり勉強した上で考えるという余裕は実際にはない、だからそういう点では各学校、総合学科のところでも学校のほうで、こういうふうを選びなさいというような、モデルをつくったり、コース制のような形でモデルプランを提示するというようなことでしかできていないという点が問題ではないかと。

それからもうひとつは生徒指導とか学習面で、結局生徒の自己管理とか、自己責任ということに期待せざるを得ないと、それぞれ自分で科目をつくっていますから、時間割が違ふということも含めて、そういう点で生徒指導への徹底というようなことについてもコメントがあります。

あとは、中退率の問題で、これは今後どのようなことになるかということだと思いますが、最後のほうに資料がありますけれど、これは文部科学省の資料ですが、幾つか数字の表で申し訳ありません。資料1のほうの平成12年度のところを、さらに詳しくやったのが最後の資料2の表です。1年、2年、3年、4年ということで書いてあります。それで見てみると、やはりかなり中退率が高い、特に1年生のところで高いと。下のほうの公立で見ますと総合学科は1年生のところで10%もいまして増えてきている。かなりきちんとはまる子はいいけれども、なかなかそうでない子は難しいかなということがある、中退の問題も全国で、今、問題になっていると。

それから8番は我々教員の問題ですが、非常に専門でない科目を、しかもたくさんの科目をやらざるを得なくなって多忙化が進むと。あるいは専門性ということで問題になるのではないかということが、非常に懸念されます。

最後ですが、4ページ目です。特に一番上の四角と、一番下の6番をまたご覧いただきたいと思いますが、そういうことで、とりあえず勉強して進路を考えて上級学校につながる、専門性の入り口を学習する。それで専門性の深化は上級学校に委ねるという、そういうことになってくのではないかというようなことで、そういう点では進学校にシフトするのではない。そういう点では、特に職業高校に代わるということは総合学科としてはできないのか。つまり職業高校をつぶして、総合学科に、つまり職業高校の統廃合の上に総合学科をつくっていくということは、非常に問題があるのではないかということです。

またぜひ読んでいただいて、ひとつの資料ですので参考にさせていただいてもいいと思います。

以上です。

(中村委員長)

はい、今日はすぐに議論というわけではなくて、皆さんの参考にしていただくためにご紹介いただきましたが、何か資料に関してご質問等あれば、よろしいでしょうか。

(吉江高校教育課長)

今、丸山委員さんから資料を提出いただきましてお話があったのですが、若干、長野県にも1校だけ総合学科高校があります。それで長野県の総合学科高校が場合によりまして、ここでいうところの、例えば中退率の状況とかが、こうではないかというような形で万が一、ちょっと誤解を受けてはいけませんので、長野県の状況だけ少し触れさせていただきたいと思いますが、長野県も具体的には塩尻志学館高校の場合で申し上げますと、退学者の率というものが、総合学科になる前は2.数%というような状況でございました。それが現状においては、0.8とか、0.4%というようなことで、非常にそういう意味で生徒指導とかは行き届いた学校だと思っております。

それから生徒のその学校に対しての満足度ということで調査した経過があるのですが、満足、あるいはほぼ満足というようなものが91%以上、多い年は93%にも上っているというような状況でございます。確かにいろいろな総合学科につきましてはご議論があるかと思いますが、例えば志学館高校の場合で申し上げますと、あそこは農業をひとつの科として当初塩尻高校の場合設置していたわけですが、専門教育ということで、広く農業とか、あるいは商業とかも取り入れておりますし、そんなことから確かに丸山委員さんがお話されたような一面があることは否めないかと思えます。

ただそれはそれぞれの設置の形態、あるいは今後どのような形でコース、あるいはシステムを策定していくかというような中で、いろいろな議論が出るということではないかと思っている次第でございます。

(中村委員長)

総合学科の課題ということで、把握しながら議論に生かしていきたいと思えます。

ご質問はよろしいでしょうか。

それでは議論があちこちいって申し訳ありませんが、先ほどせっかく多部制・単位制について議論がスタートしたので、そこに戻りたいと思えます。今日は内容をよく把握して、また詳しい内容の議論へ進めたいと思えますが、先ほど少人数で学べるよさ、あるいは交通費の面、その辺でご発言がありましたが、ほかに何かございますでしょうか。

(丸山委員)

多部制・単位制の問題で、先ほど休憩前に少人数で学べる定時制のよさというものがあるって、そのうちなくなるというのが大きな問題ではないか。多部制・単位制はかなり大規模になるので、開校時は人数が多く集まるという点で問題がありまして、それについて事務局からも説明がありましたが、ちょっと私は反論するのですが、つまり少人数でしかやれない生徒、子どもたちに対して、そのままでいいのかというのがありました。

確かにそういう気持ちは教員の中にももちろんありますが、現実、今の定時制や少人数のところ、なかなか集団の中に入れずに、学校にも行けないとか教室に入れないとか、あるいは行事も出られないとかいう子たちが定時制に行って、少人数の中で非常にゆっくりと家族的な雰囲気の中でやっていくというその中で、だんだん立ち直るといいですか、力をつけていって世間に出てくる、社会に出てくるということが定時制でできているから、この前ある新聞の投書にもありましたが、そういうことでよかったという意見もあるわ

けです。

そういうことを定時制では今、本当にじっくりとやっているわけです。だからみんながみんな教室の中で、もちろん我々の気持ちとしては、ぜひそういうことを乗り越えて世間に出れば大変なことになるので、何とか力をつけてほしいと、もちろんそういうことは考えますが、そういう力を少人数の中でつけていけるというから定時制のよさがあるわけです。そういう定時制が、しかも近いところにあるというのがものすごく大事だと思います。そういう子たちは、特に遠くまではもちろん通えないのです。通えればそんなことにならない。遠くにもいけないし、大人数のところにもいけない子たちが、本当に地元の自分の住んでいるところに定時制があるというのはものすごく大事なのです。そういうことはぜひ議論してほしいと思います。

先ほど事務局のほうで話をしてくださったのは、ちょっと一面的で、確かにそういう教員の気持ちもあるけれども、そういうことを立ち直らせるというか、そういう力をつけていくことに定時制は今すごく大きな役割を果たしているということです。少人数が果たしているというのを我々はとらえなければいけないのだと思います。

(小山(壽)委員)

今、丸山委員さんのおっしゃったとおりだと思うのです。

定時制の持っている少人数のよさというのは、本当に大きなものがあると思います。

私はたまたま須坂高校と岡谷工業が定時制の募集停止がかかるときに上田高校にいました。上田高校定時制の生徒が新聞記事を読んで、ある種の小さな討論会をやりました。募集停止は突然で不当だという生徒の議論だったのですが、その中で生徒たちが言うのは、上田高校の定時制は小規模だからいい、こういう言い方をしました。その当時上田高校定時制はひとつの学年に30人です。30人いても小規模だと生徒は言うのです。6人とか7人が小規模ですね。

つまり小規模という感覚は、必ずしも人数が数人かどうかあるいは何人かとか、そういうことではないのです。定時制の子というのは、昔だと例えば5時まで働いてそのまま学校へ来るということがありますが、今はなかなか職に就くことが難しく定職を持ってなくて、アルバイト的な職場へ行っていますので、4時くらいからもう学校へ来てしまいます。彼らが学校へ来てどこへ来るかというと、大体職員室にずっといるわけです。職員室で先生たちと話をしながら仲間が来るのを待っている。仲間たちもみんな職員室へいったん来るわけです。何人かが集まると教室へ移動する子もいる、ずっとそのまま始業時間まで職員室で話をしている子もいる。そういうある種持っている家庭的な雰囲気、生徒にとっては小規模だと感じさせるわけです。

だから、中学校の段階がどういうふうになっているかというのは、中学校によって違うわけですが、いわゆる普通の定時制の場合には多少1学級のサイズが大きくても、学年1学級であります。おおよそ彼らの従来の生活からすれば、小さな個人的なつながりというのは確保される。今、長野工業2学級ですが、長野高校、長商に定時制がありますが、100人を超えている定時制は、長野高校と長野商業、長野工業も超えているか。でも長野工業は2学級です。長野商業は単位制、長野高校は通常のいわゆる4年生の学校でありますので、小規模と言ったときの規模のとらえ方、あるいは生徒の規模に対する感じ方というの

は、必ずしも 20 人以下とか 10 人以下とかそういうようなものではないということです。

それから通う範囲ですが、上田高校の定時制についていうと、軽井沢から篠ノ井、そんな範囲から通っています。これは駅から降りてすぐ近いということがあるわけですが、軽井沢の場合については小諸商業に定時制がありますので、小諸商業の定時制のほうが近くて通いやすいではないかという話は、中学校訪問に行ったりする中でもお話したのですが、勤務の都合やいろいろなことでこちらに来たい、というようなことで遠距離になる。

必ずしも、近くはないといけないというわけでもないのです。案外固定的にこうであると決め付けていけないほうがいいのではないかなと思います。実際通ったら必ずしもそうではないケースが幾つも出てきます。だからもちろんできれば近くにあったほうがいいということであって、近くになればならないのだというのでは、少し違うのではないかなと思います。

（中村委員長）

今の小山委員のご発言は、今の通う生徒が学びの今の状態、姿が、制度と生徒の気持ちがあうまく調和してきた結果という、そういうふうを考えてよろしいですか。

そうすると、いわゆる地域や学科のある位置によっては別の姿もあり得るのですか。

（小山（壽）委員）

今、定時制に通う生徒は増えています。

少子化の中で全日制の生徒数が減っているということですが、ところが定時制の生徒数が、わずかながら微増か、あるいは減っていないという状況があるのです。ということは、高校生の数が減っているというのに、定時制の生徒の数は必ずしも減っていない。比率で見ると増えている。そういうのは確実に言えると思いますが、それはさまざまな生活リズム、学習歴を持った人たちが、定時制であるならば学べるということで定時制を求めているということがひとつあります。

それからもうひとつは、松本筑摩の定時制が、昔は昼間部と言っていたらっしゃいましたが、いわゆる午前部が 2 学級 80 人で募集して 80 人が毎年満杯に入るという状況です。それから、夜間定時制も 1 学級募集ですが、かなりの数が入ってくるということがあります。

ただ、その一方において、特に松本筑摩は昼間定時制とか夜間定時制についてはテレビで紹介されたりして、生徒がすごくさまざまな活動をしているということが知られているわけですが、その一方でやはり小さなサイズの定時制。ただその小さなサイズと言ったときに、このサイズは何人ということは関係ないのです。子どもたちが、どう感じるかです。小さく感じるか思うのですが、そういう定時制が必要であるということです。それが両々あいまって、定時制の生徒数が比率として減っていない、むしろ増えているということではないかなというふうに思います。

（中村委員長）

ありがとうございました。

現状の、詳しい内容が分かる内容だと思います。

他にご意見ございますか。

( 森野副委員長 )

今のご意見と同じような考えなのですが、やはり高校を出ていないと就職できないという、高卒は最低の就職の条件になっているわけではないですか。資格がないと受験できないという、こういったせっぱつまった子どももいるかと思います。ですからやはり地域に学ぶ場というものを残していただきたいです。ただ効率がいいとか、あるいは財政面だけで切るのではなくて、やはり子どもを育てる人は、教育は人なりと言われますが、人とあっていただきたいなと思います。それから教育は最大の福祉ではないかなと私は思います。だから校内でもどこでも福祉教育が盛んでありますが、これはやはり、公の仕事として県は重大に考えていただきたいなと重々思うわけです。

( 中村委員長 )

ありがとうございました。

他に多部制・単位制に関して、ご質問でもいいですし、資料の内容でも結構です。

( 小山 (元) 委員 )

中学校は経験してくるわけでございますが、不登校が遅れてきて、そうなるとう高等学校の生徒さん、不登校生がだいぶ増えてきていると、今お話があったようですが、そして今の県教委の方で出されたものを詳しく読ませてもらうと、働きながら学びたい生徒の居場所を大事にするという立場を、しっかり押さえていらっしゃるわけですね。午前や午後や夜働く、そういうようなタイプの子どもたち、またはフリーターやニート関係ですね。やはり多部制・単位制的な考え方を、今後第一にできないか、それは賛成するわけです。

そこで今申し上げましたように、しっかり働いて学びたい子ども、これは当然支援してあげなくてははいけません。もうひとつは居場所のない子どもたちです。ただそれをそのまま放っておいてはいけないというのは皆さん、お考えだと思いますので、その子どもたちがやはり、誰しもを受け入れるひとつの多部制・単位制の立場として見ていこうとすれば、将来は彼らのために。

そうすれば先ほども出ておりますけれども、学ぶ場所を設定するのにその子どもたちが行きやすい場所、交通の便のいいところ、やはり交通関係の大事なところ、例えばここで出されておりますのは設置するとすれば、北信地区第1通学区で1カ所であると。例えば、それは示されておりますが、もしそれをひとつの場所に集めるとすればどこがいいか。やはり北信第1通学区の中で交通便のいいところというのは、一番大事に考えなければならぬかと思います。そうするとどの辺がいいかということになっていきますと、例えば県で指名された、たたき台として出されたあれが果たしてどうか、これが私申し上げたいところです。

やはり交通便のいいところといいましたら、北信地方一体見回すと、北から飯山線、信越線、中央線もありますね。しなの鉄道あり、長野電鉄もあります。そういう要所、要所を勘案していったときに、いちばん大事なところは、それぞれの地区から子どもたちが集まりやすい、また行きやすい場所はどこなのかということです。これはやはり大事に条件として考えていく必要があるのではないかと申し上げたいのは最初はそこです。

(中村委員長)

今、交通の便という話題ですが、先ほど近いところの魅力というのもあるという小山委員の発言がありましたが、そうでもなさそうですね。遠くから通ってくる子ども、遠いからといって嫌々ながら通っているというわけではなくて、積極的に通ってくる場合もある。

(小山(壽)委員)

必ずしもそうでもないですね。

例えば篠ノ井から通っている子は、篠ノ井高校にも定時制がある。でも篠ノ井高校ではなくて上田高校まで通っている。ただそれは、勤務の問題です。自分の働いている場所が、あの子は更埴だったですね。それから篠ノ井まで戻ったほうが早い。自宅から出てきて更埴へ、それでそのまま、上田高校まで来ている。1年生のときは大体電車なのですが、2年生3年生あるいは1年生でも20歳の生徒もいるのですが、私がいたときに1番最長老は65歳ですから。そういう人たちは車で来たりバイクで来たりします。交通の便といったときに必ずしもJRやしなの鉄道というわけではないという面もあります。

ただ本当は近くがいい。絶対に近くなければいけないかという、必ずしもそうではないのです。そうでなくても、通っているということで申し上げました。

(中村委員長)

ありがとうございました。

他にご意見、質問等ありますでしょうか。

(中沢委員)

この多部制・単位制のイメージ、出発点がまず定時制だと、その次に教育の関係の中で、また不登校の皆さんのそういうことでの入り口が、まず大切だなと思います。こういう多部制・単位制高校ということをするならば、この学校へ行けば自由な選択が幾つもできると、個性に応じた教育ができると、そのためにコースが諸々と設定されているとか、あるいはここの高校ではこういう特色を生かしているようにつくっていくとか、県教委としては教員配置もそれこそAクラスを送るとか、何か高校全体のイメージというものをつくりあげて、これからの時代にこういった面での対応が必要だというようなこと等も踏まえていかないといけないと思います。

何かこういったものを受けるという中で、私が学校あるいはPTAの皆さんとお話する中でも、「そうしたら来年2人の子どもを坂城高校へ入れたけれど、この話が出ていたら来年は違うところへ入れるわな、おら。町長、そういうもんだで」というふうに赤裸々に言っているし、先ほどどなたが言われたか、発表されたことによって来年の志願者は落ちるなど、これは切実なる問題であるので、それを裏返しにするには、私のところでは今、教育委員会でもお話して、魅力ある学校づくりというのはどういうものかということなをしっかりと勉強した上で、そしてそれだけの行動を起こすなら行動を起こすことが必要です。

学校の生徒自身が生徒会でいろいろ決議するとか、対応お願いに行くとかというところ

まで、いろいろ波及しておりますので、こういった学校そのものの候補として出された面においては、十分勉強しなければいけないと思います。しかし勉強する中で選択させてもらう。勉強する中で、県の教育委員会も「こういうことだから特に力を入れてこれをやってください」というお話がでてこない、活字の中の学校になってしまいます。そこら辺で、「こういうものですわ」というところを付け加えていただけるものがあれば、お願いしたいと思います。

（宮本委員）

中沢町長から話がありましたが、私も賛成です。

今までの定時制とか単位制というような少し意識があったり、親やいろいろな地域の人たちの意識が、ひとつのほうに固まってしまうと、なかなかそれを確認ができないのではないのでしょうか。今回のこの委員会もそうですが、高校の魅力づくりの一環として再編があるのだということを押さえて、多部制・単位制のよさという、今回、県教委から出してもらった資料を見ましても、詳しいことはよく分かりませんが、今までの多部制・単位制とは、やはり少し違うところがあると思うのです。そういう魅力の中から地域でどこの高校を選ぶとか、そういう議論や考えで話し合ったらどうかなと思います。

以上です。

（中村委員長）

再編案、いわゆるたたき台というものが教育委員会から出されたわけですが、そのときに多部制・単位制に関して特定の高校名を挙げられた、その辺の理由というのを聞きしたほうがいいのでしょうか。

そういうことでしょうか。魅力が増すからこういう案が出されたというように考えられますか。

（宮本委員）

現状として、どのように県教委は考えて、多部制・単位制の出してきた背景だとか、今回、資料を出してもらった富山県の高校は、全国にある多部制・単位制高校のひとつであると思いますが、その辺の見解や意見を聞きたいと思います。

（中村委員長）

中沢委員のお話も、特にどういう理由でというようなものでしたので、その辺何かコメントいただければ、事務局のほうからお願いしたいと思いますが。

（吉江高校教育課長）

今回の候補案につきまして、それぞれのこちらの第一推進委員会に限らず、他の推進委員会の場面でもそうなのですが、総合学科高校はここでいかがでしょうかということと、それから多部制・単位制高校はここでいかがでしょうかというようなことまで含めまして、案としてお示ししてございます。

その大きな理由は、ひとつは最終報告の中でいろいろな学校のタイプにつきまして、今



後こういうような学校がいいのではないかとということで、先ほどお話にございましたように、例えば中高一貫教育を取り入れた学校や、あるいは総合選択制高校みたいなものをつくったらいいのではないですか、というようなご提案もいろいろいただいたのですが、より具体的に総合学科高校と多部制・単位制高校につきましては、各通学区に1校ずつ設置したらどうかというご提案を最終報告にいただいた経過がございます。それで、それを受けまして、私どもとすると総合学科高校で各1校ずつ、それと多部制・単位制高校で各1校ずつというようなことを含めてご提案をした次第でございます。

その内容につきましては、もちろん検討材料という前提でございますが、多部制・単位制高校につきましては、先ほど来いろいろな議論が出ておりますが、位置付けとすれば確かに定時制という位置付けではございますが、ただ現在いろいろな生活習慣をお持ちの生徒さんが、恐らくは現在は全日制高校にお通いの方も、今後はむしろ多部制・単位制高校を選択される生徒さんも出てくるだろうというようなことも想定しております。それとさらには、とりあえず私どもは多部制・単位制高校につきましては、平成14年度に多部制・単位制高校の検討委員会というのを設置しまして、過去、そこから報告をいただいた経過がありますが、長野県の多部制・単位制高校について、午前部・午後部・夜間部、この3部を持ったところを設置したらどうかというようなことまで含めて、過去、ご提案をいただいた経験がございます。

ですからその辺で、例えば午前・午後あるいは夜間というようなことで、多部を設ければ、いろいろな生活習慣の方々が、それぞれ来やすいような環境ができるのではないかと思います。また私どもが候補案ということで検討する中で考えていく上で、いろいろ考慮いたしましたのが、それぞれの現在ある当然ながら定時制と重複する分野でございますので、定時制がどのような配置になっていて、その定時制との絡みで見た場合に例えば第1通学区のエリアだけで議論する場合もございますが、どうしても隣接する第2通学区、さらには第2通学区においては第3通学区、第3通学区においては第4通学区とか、そういうようなところとの全体のネットワークみたいなものを含めて検討した上で、とりあえず検討材料としてお出ししたのが、今回のものだったということでご理解いただければと思います。

(中村委員長)

中沢委員よろしいでしょうか。

(中沢委員)

もうひとつ聞きたいのは、多部制・単位制の学校ですと、通信教育を含めて3年で卒業できますよという縛りがあるかなと。そうでなくて、一生懸命選択することによって、夜あるいは昼間を選択することによって、原則的には3年で終わる全日制と同じように卒業できる、ただそれは働いているから無理しないように、時には4年5年にもなるんだよという、そういうものの考え方ができないかどうかということをお聞きしておきたいです。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

すみません、そこはご説明しなければいけないところでした。

先ほど申し上げましたように、午前部・午後部・夜間部というようなところで、例えばベースを午前部に置かれた生徒さんが、午後部の選択の中で選びまして、それによって3年で修了して卒業するということが十分可能でございます。また夜間を主に置かれた方が、午後部を取ることによって、3カ年度で修了するということも結果的には十分可能でございます。

先ほども話題に上ってございましたけれど、現在、松本筑摩高校が昼間部・夜間部というような設置の中で、同様のようには昼間部に在籍しながら夜間部を受けたりとかも含めまして3カ年度でご卒業されている方もいらっしゃると思いますので、こういう意味では今回の多部制の場合には仮に3部制で出来上がればなおのこと、いろいろな選択を在籍する以外のところでお取りいただくことによって、履修の期間というのはかなり短くするということはもちろん可能でございます。

(若麻績委員)

今のご説明の中で、隣接地域を見られての今回の設置だと、案だということでお伺いしました。第2通学区を見ますと、佐久市内の学校名が挙がっておりますが、全体的な長野県の像を考えなくてははいけませんので、見渡すとやはり多部制・単位制の中で、例えば夜間の時間に通いたいという要望を持った子どもたちがいたとすると、終わるのが9時だということになりますと、例えば第1通学区の中の北のほうから行こうとした場合、果たしてそのような動機付けになるのかどうかというようなことを、事務局もお考えがあるのでしょうか。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

よその県の中には、実は夜間定時制というのをほとんど廃止いたしまして、これを言いますとまた「初めに何ありき」という議論になってしまいましたが、それを統合する形で、多部制・単位制にほとんどシフトしている県がございます。ただ私どものほうの県が、まず今回考えましたのが、例えば先ほど議論が出ました、中野地域にある夜間定時制につきまして、これをなくしてはその地域に通われる勤労学生の方に支障があるだろうということで、まずそこは当然残すべきだろうという前提の中で、たださりとてある程度今後の全体のネットワークのことを考えた場合に、直ちに多部制・単位制というのを数校ずつ各通学区に設置するのも、現時点では今後各1校ずつ設置して、その成果を見た上での議論であらうということの中で、当面1校ずつ設置するという前提の中で、そうした場合にはいろいろ支障が生じるであろう生徒さんのことを配慮した上で、夜間定時制を残すべきところはあるというようなところではないかという案を描いた次第でございます。

ですから、そういう意味では若麻績委員さんおっしゃられるように、例えば多部制・単位制に行きたいお子さんが、どこからでもより近いところに通いたいというようなご議論

があるとなれば、今後各地域に複数校を設置するというような議論にもなってまいろうかと思っております。

ただ現時点におきましては私どもの考えておりますのは、当面各通学区に1校でいかがかということで考えた次第でございます。

（中村委員長）

若麻績委員、よろしいでしょうか。

（若麻績委員）

確認ですが、ちなみに隣接地域からは来る子いるんですよね。上田からも通えるということですね。多部制・単位制が魅力づくりをする中で、こういう位置付けは大事だと思うので、より考えた方がよいと思います。

（宮本委員）

平成11年度から、松本筑摩で単位制が始まっているのですが、先ほど志学館の生徒のスキームの説明があったのですが、その辺のところは県教委のほうでは考えていらっしゃるのでしょうか。

（中村委員長）

事務局、お願いします。

（篠原教育幹）

実はこの松本筑摩高校の満足度調査という形では、私ども把握はしておりませんが、例えば多部制・単位制検討委員会の中に、松本筑摩高校のご出身のまだ若い委員さんに入っていただきまして、それからさらに多部制・単位制検討委員会のお1人に前校長先生も入っていただきました。そういう中で議論をしながら、やはり多部制・単位制のよさという、多部制・単位制というふうにはっきりいえない状況ではありますけれど、昼間定時・夜間定時というこの2つをもっているよさ、こういうものを十分に語っていただいて、他の委員さん方が参考にしたと、こういった経緯はございます。

（塚田委員）

定時制でひとつ大きな問題というのは、やはり最終学年終えて卒業しないでのドロップアウトということがあると思うのですが、多部制・単位制にして複雑になった中で例えば富山の例がありますが、数が減ったとかそういった資料は見つけましたか。

今の松本筑摩でも結構ですが。

（三澤教育支援主事）

松本筑摩高校につきましては、周りの定時制を統合した経緯はございません。本日資料でお出ししました志貴野高校につきましては周囲の定時制を統合をしてつくっているという経過がございます。

( 塚田委員 )

定時制の中退者について聞いたのですが、資料がなければ結構です。

( 三澤教育支援主事 )

ちょっと手元に資料がございませんので、すぐお答えできませんので、また次回にお願いします。

( 中村委員長 )

ご意見、ご質問等よろしいでしょうか。

( 丸山委員 )

この地区には、単位制も通信制も現在ありますね。それをこちらに集めてしまうという話があったのですがそうではなくて、そのところでそれを充実させていくという方式とか、あるいは全日制のところを編成させるというそういう方式は無理なのかどうか、考えなかったのかどうか。考えられないのかというと、やはり私も思いますが、今、出ている案でいうと、そうは言っても全地区的にそのニーズがあるとしたら場所的には非常に片寄っていると感じるし、普通科をする人という形はあまりいただけないなと思います。特にその地域の問題と、普通科をつぶすという問題。

それから今ある単位制・通信制をまずそこで充実されていることはなぜいけないのかということ。それから、確かに通い方としてはいろいろな生徒がいるので、例えば仲間の関係で友達関係とかいろいろなことでその地域から外れたところへ行っている子もいるから、遠くへ行くという子も例外的にいるだろうけれども、多くの生徒はやはり近いところに定時制があるということが大事だし、そういう点でいくと、いまいち分からないのが多部制・単位制というのは要するに、午前と午後と夜というふうにいつでも好きなときに行け、しかもそれを乗り越えて、別の特殊なところでも行けるという、自由さがあるということはあると思います。

そういうニーズがある生徒と、一般に近くに夜間でもいいから、本当に少人数のところに行ってゆっくりと力をつけていく子たちと、そのニーズがどのくらいなのかというところがまだよく分かりません。

しかもそういう点でいくと、6 学級というふうに言っていますが、新しくつくるといって、6 学級規模にもなるのかなというそれも、多部制・単位制の面で考えても大き過ぎるなということがあるのではないかと。その辺は、県教委のほうではどんな検討をされたのかということ、ちょっとお聞きしたいと思います。

( 中村委員長 )

事務局、お願いいたします。

(吉江高校教育課長)

まず1点目なのですが、現在長野商業高校は確かに単位制でございます。また長野西高校に通信制が設置されています。長野西高校には、定時制は設置されていないというような状況の中で、私どものほうで今回こういうような形でどうかと、具体的には先ほどもお話に出ましたが、再度申し上げますと多部制・単位制高校を設置しつつ、ひとつとしましては、中野地域の学校はそのまま定時制ということで残しまして、それで長野地域の学校としましては、長野高校と長野工業高校を定時で残しまして、あと違う学校につきまして、長野吉田や長野西あるいは長野商業や篠ノ井につきましては今後設置する多部制・単位制をにらんで、統合するようなことでどうかというような案をつくった次第でございます。

ただ例えばの話が、長野商業をひとつの選択肢として現在が単位制でございますので、そこをかえて残したほうがいいのではないかというような提案は、当然あるかと思えます。ですからそれにつきましては、当然ながら委員さん方のご議論の中で深めていただければと思っています。

またもう1点、独立校でなくていいのではないかというお話がありますが、ただこれはなかなか難しいお話ではありますが、一般的に定時制にお通いの生徒さんは全日制の生徒さんと顔を合わせるのを嫌う傾向がございます。言ってしまいますと、交わりたくない。だから校舎も別にしてほしい、定時の生徒が行ったときにはそこに全日の生徒さんがいない環境にしたいというようなことが、恐らく一般的に言われていることでございます。

それを考えた場合に、先ほど言っていた報告書も踏まえまして、ひとつの独立校舎ということである程度以上集まるような、ある程度以上集まるということは多様な教育ができるということでございますので、当然ながら先生の数を増やします。先生の数が増えればいろいろな学習形態の授業の展開もできますので、そういうようなことで十分な授業展開をするような環境をご提案したいというようなことで考えた次第でございます。その中で独立校舎でいかか考えた次第でございますので、よろしく願いいたします。

(中村委員長)

今のご説明で、ご質問等ありましたら。

よろしいでしょうか。

多部制・単位制については、中身がだいぶよく分かってきたというふうに思います。またこの議論がどんどん続いていくわけなのですが、今日は総合選択制ということで、蘇南高校の教育課程を参照した時間割の例という資料が、資料2で示されていますが、これをもう少し詳しく説明いただきたいと思いますと思いますが、これは別の推進委員会での資料ですか。

(三澤教育支援主事)

蘇南高校総合選択制資料の2でございますが、蘇南高校につきましては、先ほど申しましたように普通科1学級、商業科1学級、工業科1学級の3学級募集をしております。3学級募集をしまして、そのあとホームルームが通常の学校では学科単位に1つのホームルームという形をとるところが多いわけですが、簡単に言ってしまいますと40人募集しておりますので、普通科10人、商業科10人、工業科10人で1つのホームルームにしております。ですから3学級募集なのですがホームルームは4つあるという形をとって、その1ク

ラス1クラスがミックスホームルームと呼ばれています。

なるべく学科間の生徒はそれぞれ同じクラスの中でクラスの活動ができるようにということで考えられているわけですが、必修科目に先ほどありました1番左側の欄の部分につきましては、どこの学科からも同じ時間数で授業のできる科目、それをミックスホームルーム単位で全部の学科の生徒に同じように受けるという形をとっております。

同じ国語や数学が、普通科のところでは2度出てくる場合もあるのですが、例えば2年生必修に国語というのが2カ所ですけれども、一方は科目の中身が違いますが、この部分については同じ単位数・時間数で商業科や工業科の子どもたちが受けるのと同じ単位数を普通科の生徒もミックスホームルームでやっています。それを超えた部分につきましては、普通科は普通科だけの授業として国語をやっているという形になっております。そのようなところも総合選択制の中では工夫していく必要があるということです。

それ以外にメリットとしまして、お互い1クラスのホームルームの中に全然違う専門科目を勉強している生徒がいるものですから、お互いのやっている専門性を尊重しあうという傾向もあるようです。当然ホームルームの中で話をしているときに、工業科の生徒さんが例えば実習で使ったような作品を持ち歩くことはあまりないかもしれませんが、プログラムのリストを持って見ていると、それを普通科の生徒さんが横から見わけです。そうすると何かすごいことをやっているという思いがあって、お互いにやっていること、専門的に勉強していることを尊重し合うという側面も出てまいります。

それと全学科共通選択のところでは、どんなことが起きてきますかという、2年生のところを見ていただくと、国語・公民・数学・理科・芸術・英語というようなものが普通科のところに入っております。それと商業科でマーケティング、工業科では電子計測制御、ハードウェア技術とあるのですが、それぞれ1クラスずつ、講座は1つ、そこに普通科の生徒、商業科の生徒、工業科の生徒同じ教室で同じ専門科目を受けていくという形です。全学科共通選択にする科目というのは、専門科目としては比較的誰でも受けられるような科目設定をしていかなければいけないとか、いろいろ工夫はあるのですが、そういうところで、専門の科目をどこの学科に所属していても受けられるということが特徴になってまいります。

時間数の関係、時間割の組み方の関係等で、なかなか難しい面もありまして、3年次になりますと、商業科の科目を工業科の生徒が受けられるような形をとっておりますけれども、こんなようなところも工夫の仕方、あるいは時間割をいろいろ工夫しますと、電気科の選択科目も商業科の生徒が受けられるとか、普通科の選択科目を同じ時間割のところに少し配置しておくということも実際には考えられます。ただ3学級規模でやっておりますので、先生の数にも制限がありまして、実際の時間割のコマを入れていく段階で、いろいろな障害が出てきたりということで、なかなか難しい面はありますが、学校の工夫によって生徒たちにいろいろな選択肢を提供することができます。

講座によっては、例えば大学受験でどうしても理科の高度な科目を勉強しておかなければいけないという、受講する生徒は少なくともそれは設置をして、選択がどこの科からでもできるようにしていくという工夫を、蘇南高校ではやっております。

(中村委員長)

総合学科との違いが、今、最後のほうに説明があったと思います。総合選択制これはひとつの魅力あるシステム、学校のタイプの選択肢であるというような資料でしょうか。第一推進委員会でこれが示されたということは、こういう選択肢も魅力づくりのひとつだよということですね。

(三澤教育支援主事)

最終報告書の中に総合選択制ということで、その他の柔軟な魅力ある高校づくりということで示された部分でありまして、簡単に説明書きがされているのですが、具体的にはどんなものであるか、そのイメージがわからないため、他地区の推進委員会で具体的にどのようなになっているのかということを資料で示してくださいということで、用意させていただきました。当然これは総合選択制の学校というのは最終報告書の中にありますので、全県の高校の中の魅力づくりということで考えていただくひとつの案だと思いますので、今回用意させていただきました。

(中村委員長)

分かりました。ありがとうございました。

時間があと3、4分ですが、何か他にございますでしょうか。

(宮本委員)

松本筑摩の単位制のことなのですが、平成11年度から単位制に移行しているのですが、前回の委員会にも、県教委として出された資料の中に、単位制のメリットなどいろいろあるのですが、そのひとつの中に転入学や編入学の生徒も受け入れるというようなことが書かれてあります。高校の単位取得者の場合に、多くの場合に、県民として進ちょく状況ということで、常に学びたいということだけではないですけれども、前回出したところの資料を見ますと、生徒数の減少の表がありますが、平成11年度は1,000人から半分、17年度になると300というような人数で減少する現状なのですが、実際のところどのくらいの生徒が1年間で受験する状況であるのか、松本筑摩高校の現状について説明していただければと思うのですが、また資料等は次回のときで結構ですが、同じようなことではなくて、やはりもし今回の魅力ある学校づくりとして再編を考えるならば、また新しい形の単位制あるいは多部制の高校について検討しなければいけないのではないかと思います。

(中村委員長)

そうですね、それも推進委員会の役割だと思っています。

資料については、次回準備していただけますでしょうか。

(小山(壽)委員)

それから最後に、松本筑摩が昼間定時制はあまり編入を受け入れていない、ただ満杯に入れてしまった。単位制というのは1年生、2年生、3年生ではなくて何年に入学したか、何年目か、だから塩尻志学館もそういう話をしてそういうやり方でやっていますので、満

杯にしてしまうとなかなかその後、編入を受け入れにくいという問題があります。

新潟県などでやっている単位制の学校は、最初から編入学を見込んでいます。だから他県の例で、80 人入れるところは 60 人で募集して、残りの 20 人はその後の編入学ということで残しておくというようなやり方をしているところがある。長野商業はかなり編入を受け入れていますし、他にも単位制にはなってないですが、夜間定時制でも編入を受け入れていますので、もし調べるならば松本筑摩だけではなくて、長野県の定時制がどれだけ編入を受け入れているかということで調べたほうがいいと思います。

長野商業については、前期卒業を可能としているはずですので、後期入学というのもできるのではないかと、1 年を 2 学期制にして前期試験が終了して 9 月に卒業できるという生徒もいるようですので、当然後期受け入れということも理論的には可能なのですが、その辺について今どうなっているのかということも合わせて調べていただくといいかなと思います。

（中村委員長）

制度について、より深く知るために、ぜひ資料をお願いしたいということです。  
事務局、お願いします。

（吉江高校教育課長）

先ほど塚田委員さんから資料をといたお話ありましたので、その資料に合わせまして松本筑摩を中心に今も小山委員さんからいただきましたように、定時制全体につきましても含めて若干資料用意いたしまして、次回の委員会でお示ししたいと思います。

（中村委員長）

特に他にございますでしょうか。

（清水委員）

よく考えがまとまらないのに発言してお許しいただきたいのですが、単位制・多部制も含め今まで討論をされている魅力ある学校ということについて、例えば時間にしても学校づくりにしる多くのカリキュラムから選択できるというものに対して、果たして本当に子どもたちが欲している魅力というものに合致しているのかどうかという、根本的なところがよく分からないという疑問を感じるのです。

定時制のことに限って絞って考えますと、たまたま須坂高校の場合もう既に定時制の募集停止を実施しておりますが、地域の振興会という役員を仰せつかったもので 2 度ほど卒業式に携わらせていただいたわけですが、全日制の他校に行っている子どもたちよりも、はるかにいろいろな事情を抱えて定時制に入っているわけです。ほかの学校を退学して 1 年待って定時制に入学し直すとか、いったんは定時制に行くのが嫌になってしまって辞めてしまったけれど、やはり森野さんが前おっしゃったように、どうしても高校の卒業という資格が欲しいために来ているというような子どももいるわけです。そういった様々な事情を見ていると、その子どもたちがどういった学校が自分たちは欲しているのかということに視点を合わせてみると、選択肢は確かにたくさんあるのですが、そういうも



のを本当に望んでいるのかということを疑問に思ったわけでございます。

質問のような意見のような感じで申し訳ないのですか。

（中村委員長）

分かりました。

3 回にわたって魅力あるシステムづくりといいますが、総合学科、多部制・単位制、それから個々の学校の魅力づくりということについて、勉強させていただいたということだと思います。

たくさん資料もいただきましたので、次回ぐらいからやはりこれらのシステムを総合しながら第一推進委員会の範囲内で、また魅力づくりについて全体的な議論をしていきたいと思います。その中で、やはり子どもたちの意見あるいは保護者の意見等、我々が積極的にお伺いする時間が、あるいはそういう機会を設けるかどうか、皆さん方にご意見をいただきたいと思うのですが、そういうことも含めて推進委員会を運営していきたいと思います。

ただいまのご発言は、その辺のことでよろしいでしょうか。

（清水委員）

実態に即した魅力ある学校というものが、やはり大事だと思っています。

（中村委員長）

推進委員会だけの議論でなくて、もっと広く見てということですね。

（清水委員）

そうですね。

特に学校の先生方、校長先生たち、そういった方々は実態を把握されている部分が多いとは思っています。

（中村委員長）

推進委員の皆さんは、それぞれの団体、あるいはお役職の立場で周りの方にお話を聞いてここで発言されていますので、かなりの情報を得られていると私は理解しておりますけれど。さらに、もっと詳しく丁寧にやっていきたいと思いませんか。

（清水委員）

ご提出いただいたいろいろな資料を見る限り、何となく数字とか文字とかいうものであって、何か私はこのままいいのかなということを、ちょっと疑問を感じたわけで発言させていただきました。

（中村委員長）

分かりました。

その辺の不安を解消する良い方法も考えていきたいと思います。

( 青木委員 )

私どもがいただいた、4 つのテーマのうちの 3 番目の「総合学科高校及び多部制・単位制高校の配置に関する事項」という、これが 4 つのうちの 1 つのテーマであるわけですが、これをするためには、とにかく私どもが見知らぬ、また目新しい言葉であったし、いったい中身はどんなのかということを知るために、レベルを合わせるために私は 2 回目と 3 回目、とあったつもりであります。まだ 1 度たりとも 1 番の魅力ある高等学校づくりについての議論は、私ども戦わせたという認識がないのでありますけれど、それ間違いないですかね。

( 中村委員長 )

先ほど、多少多部制のところでは出てきたというふうに思っておりますが。

( 青木委員 )

それは出てきたというだけであって、あくまでもレベルを合わせる、この 3 番に関する情報、基礎知識を得たということで。

( 中村委員長 )

勉強させていただいた時間であったと思います。

( 青木委員 )

時間もないので 1 点だけ。

要綱にある第 7 条等、休憩前にも少し話題が出ました、旧 12 通学区ごとに部会を設置することができるので、これは県教委の要綱を例えればのときに、どういう意図をもって、この部会という位置付けを考えたのか。

また委員長さんは部会を今後どういうふうの場合によっては設置について県教委に求めて設置をし、またその設置した部会はどういう役割を果たしていくのだろうというお話を県教委、委員長さんそれぞれお聞きしたいと思います。

( 中村委員長 )

事務局、お願いします。

( 吉江高校教育課長 )

ベースはあくまでも、ここにお集まりの推進委員の皆さんでございます。

それで推進委員の皆さまが、設置するとしてその部会にどのような議論をしていたいて、どういう内容の報告を受けたいというようなことを明確にお決めいただいた上で、それで部会の設置が必要だというようなお話になれば、部会の設置をというような上で要綱の中に入れさせていただいたという主旨でございます。

(中村委員長)

私はこの推進委員会全体で話し合っているのは、全て関連した内容を話し合うために皆さんにお集まりいただいていますので、部会となりますと個々の議論になります。ですから個々の議論の必要性に応じて、設置しなければいけないと考えますので、そういう必要性が出てきた段階で設置を皆さんにご提案していきたいと思います。

それでは時間がまいっておりますので、次回の予定等について事務局のほうからお願いします。

(三澤教育支援主事)

次回の日程についてですが、以前にいただいております日程の確認表等で、7月にもう1回お願いできればと思います。7月25日月曜日の午後ではどうかと考えております。その後は委員長さまともご相談の上、あらためてご案内させていただきたいと思いますが、よろしく願いいたします。

(中村委員長)

皆さんのお手元に、推進委員会日程確認表というのが再度配布されていると思いますが、そのご説明をお願いします。

(三澤教育支援主事)

お手元に日程確認表、以前6、7、8月の分ということでお配りさせていただいたのですが、8月まだ日程が決まっていないということで、注意書きをいただきました委員さんもありましたので、今回また8月以降のところを午後・午前と分けて、それぞれ都合のつかないところを、バツ印を入れていただくという形でお願いいたします。

後日ファックスで結構ですので、お送りいただければと思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

それでは次回は7月25日の午後ということです。詳細につきましてはまた通知を事務局のほうからお願いしたいと思います。

それでは以上をもちまして第3回の推進委員会を閉会とさせていただきます。

どうもお疲れ様でした。